日本植物園協会ナショナルコレクション更新申請書

☑更新申請
（認定番号　001　　これまでの認定期間 2018 年 6 月 19 日～2023 年 6 月 18 日）

■更新申請年月日 2023 年 6 月 5 日

■コレクションのテーマ
武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群

■申請団体・申請者名
武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園

■申請団体の代表者名（個人での申請の場合は不要）
非公開

■申請団体・申請者の連絡先（住所、電話、メールアドレス）
武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園
京都市左京区一乗寺竹ノ内町 11 番地
075-781-6111

■コレクションの所在地（コレクションが分散している場合は主たる所在地）
京都市左京区一乗寺竹ノ内町 11 番地

■現地審査希望時期
2023 年　3 月　8 日
希望する理由：再申請にあたり追加する品種の開花期にあたるため

■コレクションのテーマ
武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群

■コレクションの概要
当園のツバキコレクションは 1956 年、当社六代目･武田長兵衛社長が訪米からの帰路、ハワイにて「ユキツバキ」の存在を知ったのが発端である。社長の命により同年から当社研究所、冨樫誠研究員がユキツバキの収集に向けた調査を始めた。現在、ツバキ園には古品種（市販の古い品種）325 品種、新品種（当園が原木または穂木を収集し、新たに命名した品種）136 品種および外国から導入した品種 44 品種の計 505 品種が植栽されている。特徴としては品種名が正確な点である。古品種は東西のツバキにかかわる学者、業者、趣味家ら 10 名で組織した品種同定会（1974 年と 1975 年に開催）において当該品種と同定されたツバキ、新品種は武田科学振興財団発行の「日本の椿（1968 年、津山尚編、廣川書店発売・東

京）」において新品種として公表されたツバキとなっている。なお、2018 年にはバックヤードにおける鉢での管理のため未申請となっていた品種のうち大株へと生長したものについては順次ツバキ園への移植を行い植栽展示に移行している。そのため、上記の古品種数、新品種数、海外からの導入品種数については初回申請時の品種数から現状に見合った品種数への補正を行っている。

ツバキの園芸化および品種の発達は江戸時代初期に始まり、特にヤブツバキとユキツバキの両種が生息する北陸地方では自生個体に幅広い変異が見られ、そこから数多くの園芸品種がこの地方で得られた。それらは寛永から元禄年間にかけて京都を経て全国各地の武家屋敷や寺社仏閣に広まっていったと考えられる。これらの貴重な品種や個体は高度経済成長期の各種開発（宅地、工場、道路、植林など）により消滅の危機にあった。また当時お茶の水女子大学の津山尚教授は北陸地方をはじめとする各地のツバキにおける八重化個体の分布を研究中であり、頂戴した種々の情報をもとに、福島県の西会津町、新潟県の東頚城郡や岩船郡、富山県の東砺波郡や婦負郡、石川県の金沢市、福井県南条郡、京都市伏見区、福岡県太宰府市などの各府県に現存していた個体の調査・収集を行い、新品種を得た。

当園で新たに命名した新品種として保有していた 155 品種のうち、2018 年の当コレクション認定時にツバキ園で植栽展示していた 121 品種を申請してナショナルコレクションとして認定済みである。初回の認定時には未登録だった 34 品種のうち 19 品種は枯死して現存しない。一方、2018 年にはバックヤードにおける鉢での管理のため未申請となっていた 15 品種について、その後の 5 年間で大株へと生長し、現在はツバキ園へ移植して植栽展示に移行したため、今回、同コレクションへの追加品種として申請を行う。そのため、現存する新品種の基準木（nomenclature standard）は 136 品種に更新している。「武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群」に属する現存品種はこれが全てとなる。

■申請者が保有するコレクションの種数、品種数、個体数
別紙「保有植物リスト・写真ファイル記入要領」にしたがい提出）
日本各地で栽培されていた 136 品種、136 株

■申請するコレクションのこれまで報告されている総数と申請者が保有する数

「武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群」に該当するツバキの品種は武田科学振興財団発行の「日本の椿（1968 年、津山尚編、廣川書店発売・東京）」において新品種として公表されたツバキで、155 品種が総数で、当園で現在保有する品種は 136 品種である。

■コレクションの栽培管理状況（所在地が分散している場合にもここに列記）

基本はツバキ園での露地栽培を行い、樹勢が劣ってきた個体については挿し木等の栄養繁殖を行いバックヤードで次代の株を育成している。

■コレクションの導入記録及びデータベース化の状況

導入時の手書き台帳に記載されたオリジナルの文字情報を紙ベースで保存するとともに、それらをエクセルに入力してデジタルファイルでも管理している。

■コレクションのラベル表記状況（栽培管理用ラベルや展示用サイン・ラベルなど）
ツバキ園においては長さ 1m 程度の杭にラベルを貼り付けて品種名の表示を行っている。

■コレクションへの協力団体・協力者（種名の同定、導入など）
コレクションの収集にはお茶の水女子大学の津山尚教授および社員である渡辺武、冨樫誠両研究員に、個体識別の整理には武田科学振興財団の三宅馨理事に負うところが大きい（肩書きは全て当時のもの）。

■コレクションの長期保存のための方策と体制（増殖、栽培管理上の工夫、栽培技術者や後継者の育成、危険分散等）
樹勢が弱いと感じられる個体については、適宜、園内において栄養繁殖を実施して安定的かつ継続的な次代株の育成を進めている。

■コレクションの公開の現状と今後の方針、これまでの広報・利用実績（研究等を含む）
今回の申請に関わる個体の生育特性、形態的特徴は武田科学振興財団発行の「日本の椿（1968 年、津山尚編、廣川書店発売・東京）」としてまとめられ、別巻の花の写真集とともに出版されている。年 4 回開催している一般公開のうち 3 月下旬～4 月上旬での実施分、地元見学会、従業員見学会などではツバキ園を公開している。

●広報等実績
○講演
・植物園シンポジウム「ふるさとの植物を守ろう」（主催：（公社）日本植物園協会）第 17 回 2019 年開催
・植物園シンポジウム「ふるさとの植物を守ろう」（主催：（公社）日本植物園協会）第 21 回 2023 年開催
・つばき展（主催：京都府立植物園、（一財）京都園芸倶楽部）第 62 回 2023 年開催
○展示会
・つばき展（主催：京都府立植物園、（一財）京都園芸倶楽部）第 60 回 2021 年開催
・つばき展（主催：京都府立植物園、（一財）京都園芸倶楽部）第 61 回 2022 年開催
・つばき展（主催：京都府立植物園、（一財）京都園芸倶楽部）第 62 回 2023 年開催
○寄稿
・「冬を彩るツバキ」京のみどり No.97, p.3-4, 2021 年（公財）京都市都市緑化協会発行
・「ツバキ園の歴史と保有品種について」花 第 441 号, p.6, 2022 年（一社）フラワーソサイエティー発行
・「武田薬品・京都薬用植物園とツバキ園」くさかや 第 31 号, p.1-3, 2023 年 日本植物画倶楽部発行
・「ナショナルコレクションに認定された武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群の紹介」 園芸春秋 第 652 号, p.2, 2023 年（一財）京都園芸倶楽部発行